

新型コロナウイルス感染拡大の状況下における 「明星LMS」、オンライン会議システム、「対面型試行授業」の 複数形式を連動させた 教育活動の実践と課題に関する1事例

碓 朋 子

要 旨

本稿では、新型コロナウイルスの急速な感染拡大の状況下における、大学教育現場における今回の新型コロナウイルス感染拡大の状況発生時点の以前から既に本学において本格的に導入・運用されていた主たる学修支援システムである「明星LMS」、ならびに、「Zoom」等のオンライン会議システム系のソフト、並びに主に後期以降に幾つかの科目で試験的に導入が開始された「対面型試行授業」を、有機的に連動させる形で併用した、いわゆる遠隔授業の総合的な取り組みに関し、筆者自身の実践ならびにそこで認識した課題に関し、1事例として報告する。本学において、あるいは我が国あるいは全世界中で、「学び」を取り巻く環境が1年前には予想もされなかったような変化を強いられる中、諸制約の中で個々の教員は試行錯誤しつつ、少しでもベターな教育を提供できるよう格闘した。本稿は、筆者自身にとってもそのような一連のプロセスに関する一種の「振り返り」でもある。

1. はじめに

新型コロナウイルス感染拡大の状況を受け、2020年度開始直前、本学においても2020年度前期授業は、全学的に多くの科目において「遠隔授業」型にて実施されることが決定された。これを受けて、各教員は、全学的なガイドラインのもと、担当科目の内容、特性や目的、あるいは現状での学生の情報環境や各種情報ツールの習熟度などにも配慮しつつ、「遠隔授業」の実施方法を検討し実施していくこととなった。筆者は、本学における専任教員として、本学部・

学科において2020年度、講義科目としては「マーケティング1」（前期）、「マーケティング2」（後期）、「商学入門1」（前期）、「商学入門2」（後期）という4科目、演習系の科目としては1年生対象の「基礎演習A」（前期）および「基礎演習B」（後期）、3年生・4年生対象のいわゆる「ゼミ」的な科目として「専門演習1a」「専門演習1b」「専門演習2a」「専門演習2b」、そして4年生の卒業研究論文の指導科目である「卒業研究」という計7科目を担当している。しかし実際の「遠隔授業」の実施においては、それぞれの科目特性や主に配当学年によ

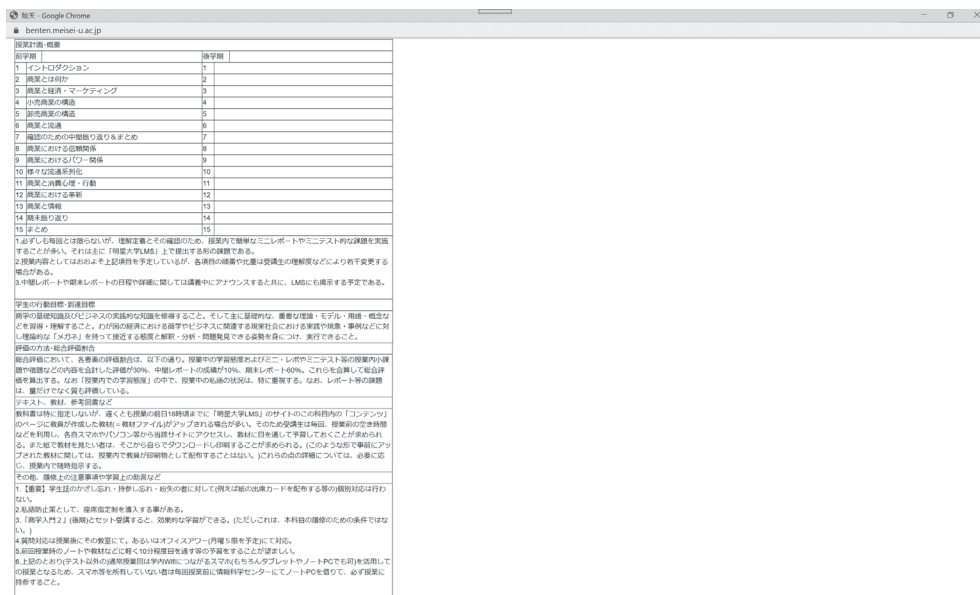
る学生の属性などを考慮し、各科目において試行錯誤しつつ、かなり異なった様態で授業を実施していくこととなった。そこで下記では、ある程度パターンを分類し、その現実的な実践の事例およびそこで認識した課題点等に関して、紹介していく。

2. 講義系の科目に関する教育活動の実践と課題

筆者の担当する講義科目、すなわち「マーケティング1」（前期）、「マーケティング2」（後期）、「商学入門1」（前期）、「商学入門2」（後期）においては、配当年次が「マーケティング」の場合3年次以上、「商学入門」の場合2年次となっているため、受講生たちは全般に、比較的に本学の学修支援システムである「明星LMS」の操作方法に慣れていている者が多い。また筆者は、これらの科目の授業実施に当たっては、既に数年前から紙媒体での資料配布等はほぼ行わず、代わりに「明星LMS」上の当該科

目の「コース」内の「コンテンツ」に授業前日までに当該授業で使用予定の「教材」をPDFファイルやPowerPointファイル等の形式にてアップしておくという形態をとっていた。例えば「中間レポート」の実施など当該科目に関する重要な予定に関しては「コースニュース」にて流し、また毎週の課題の提出に関しても、当該科目の「コース」内の「レポート」のコーナーに掲出し、そこから「オンライン入力」形式で提出させる形である。そのため、2020年度の当該科目の「シラバス」においても、下記「図表1」のように、そういった様態で授業を進行する旨、履修登録以前の時点から周知していた。従って、受講者はこれらの科目に関して予めその旨ある程度は了解した上で、履修登録したと考えられ、2020年度のこれらの科目の実際の運営方式が「対面型授業」ではなく「遠隔型授業」となっても、受講生にそれほど大きな混乱はなく、対応してくれていた。

これらの科目に関する実際の「LMS」上での見え方は、下記の図表のとおりである。例え



図表1 当該科目の2020年度「シラバス」の例

ば、「コースニュース」では科目運営に係る重要な告知を、後からでもいつでも閲覧できる形で掲出し、また図表3のように「掲示板」コーナーには、授業日ごとの「スレッド」を予めたてておき、当該授業日の授業開始時刻以降は、

その日専用の「スレッド」に、授業終了時刻までの90分間の中で、筆者がリアルタイムで数回の書きこみをしていき、その日の「学び」のスケジュールに関してある程度誘導し、コントロールしていくという形式である。



図表2 当該科目の「コース」のトップ画面



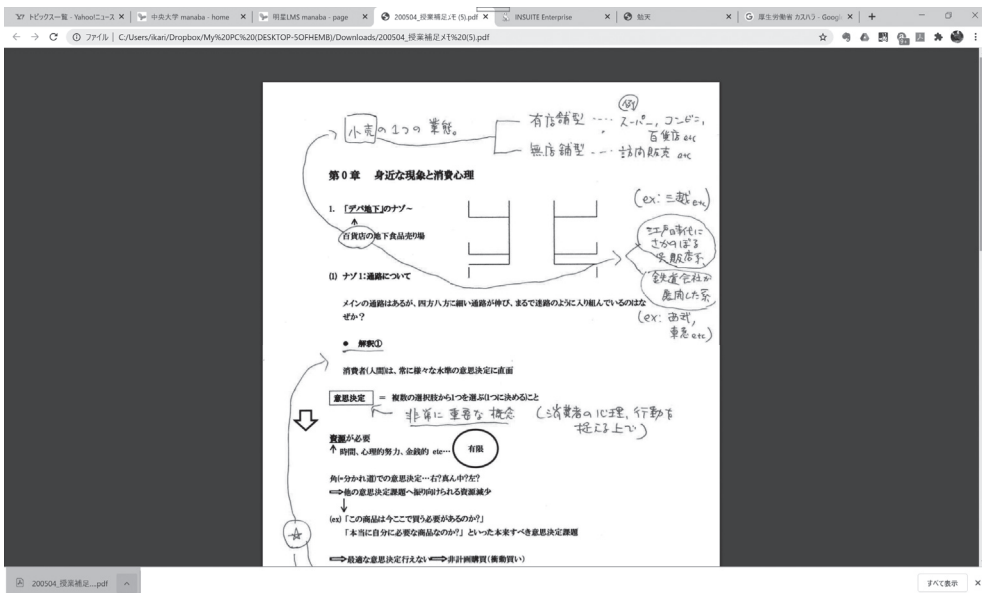
図表3 当該科目の「掲示板」の例

一方、図表4のように「コンテンツ」のコーナーには、その章での主たる「教材」となるものをPDFファイルにて事前にアップすると共に、「学び」が更に円滑に進むよう、必要があれば、補足的資料として、図表5のような筆者

の「手書きメモ」ファイル（PDF形式）や「音声メモ」ファイル（m4a形式）も合わせてアップした。また、図表6および図表7のように、その章で学んだ理論・用語・モデル・概念などを活用して現実社会における現象や事象な



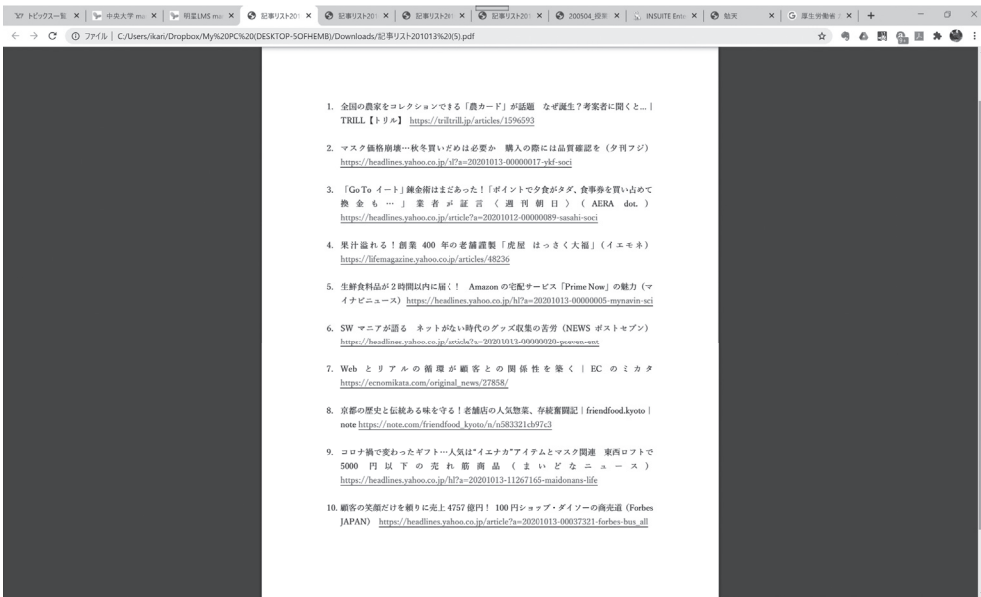
図表4 当該科目の「教材コンテンツ」の例



図表5 当該科目の「手書きメモ」の例

どを理解・分析・把握できるような態度を養うことを目的として、毎回、著作権の問題なく、また内容的にも、未成年が含まれる学生たちが閲覧・視聴しても内容的に不適切ではなく、そしてもちろん「学び」の助けとなり、かつ

Web上にてあまり「パケット」的な情報量的負荷も小さく容易に閲覧・視聴できる、最新の記事や動画へのURLリンクをまとめたりリストをPDFファイルとしてアップした。かつ、図表8のように、毎回の小課題もこの記事や動



図表6 当該科目の「紹介したい記事リスト」の例



図表7 当該科目の「紹介したい動画へのURL」の例

画の閲覧・視聴とリンクさせることで、毎回の授業における学修と当該科目の科目目標の達成の促進を図った。

なお、毎週の授業時に実施した「小課題」に関しては、当該授業時の「出席確認」の工程を

兼ねると共に、毎回の授業での「学び」の定着と当該科目の「科目目標」の達成の促進を意図しており、また、受講生が他に履修している科目との兼ね合いで、総合的に過大なる心身の負担にならないように配慮した。具体的には、当



図表8 当該科目の「毎回の小課題」の例



図表9 当該科目の「小課題のフィードバック」の例

該「コース」上の「レポート」のコーナーに提出する締切日時を授業日の1日～2日後に設定し、また最低字数も200字程度とし、内容的にも当該授業の「教材」や授業内で紹介された「記事」ないしは「動画」を視聴・閲覧すれば、容易に回答できる水準の課題とした。さらに、提出された課題に対する「フィードバック」に関しては、「LMS」上の「成績」のコーナーから学生個人に対して例えば「Good」といった反応を「コメント」として入れるのみならず、受講生全体から見て、優れた内容の「課題」に関して情報共有し、そしてそれを提出した個人に対しても励みになるよう、図表9に示すように、個人情報の保護には配慮し、匿名ではあるものの、優れた「小課題」の内容を毎回、5名程度、その文面をPDFファイルにまとめ、当該「コース」上で公開した。

なお、もちろん「遠隔授業」に関して定められた全学的な「ガイドライン」、すなわち、基本的に「明星LMS」を授業運営の基本的な柱として必須で使用し、必要であれば例えば「Zoom」等のいわゆる「オンライン会議システム」的なツールも併用しても構わないという方針には従いつつ、これらの講義系の科目においては、後者の利用に関しては、前期開始直後頃に多少の検討はしたものの、結局は用いなかった。主な理由としては、以下の点があげられる。第1に、少なくとも前期開始直後頃の時点では、担当教員である私自身が「Zoom」は未経験であって、これの使用法に関してこれから急ぎ習得し利用できるように努力するとしても、すぐさまにはこれを円滑にかつ効果的に活用できる自信が得られなかった。また、これは受講生に関しても、同様な懸念を感じた。第2に、少なくともその頃の時点では、ほとんど全ての科目において「遠隔」形式で授業が実施される現状において、自宅の情報環境に関し、多

くの受講生が例えば「明星LMS」を閲覧する程度であれば何とか可能であろうが、「ハード」的な側面、すなわちPCやタブレットといった情報機器のみならず、例えば「Zoom」等のいわゆるオンライン会議システムを利用して90分間フルで授業動画を視聴しても全くトラブルが発生しないような強靱なネット回線という点では、現実問題として支障や不安を抱えている者も多いであろうと判断した。そして第3に、履修者の人数的な観点からいって、少なくとも4月の時点では、大人数の講義科目での「Zoom」の使用が、物理的に困難な状況であったという点である。例えば筆者も、試しに作成した無償での私的なアカウントにて「Zoom」自体の練習はしてみたものの、実際に授業で使用してもなれば、そういった私的なアカウントにての会議室設置ではなく、科目担当者としての責任の所在という観点等からも、やはり大学の公的なアカウントで利用するのが望ましいことであろうと判断した。ただ、公的なアカウントにて数百人規模の受講生との「Zoom」授業が可能になるのは5月頃だということであったため、それとも照らし合わせると、いったん学期始めに「この科目は、明星LMSを主体で進めていく。『Zoom』等のいわゆるオンライン会議システムは恐らく使用しない。」と担当教員である筆者が当該科目の運営方針を決定し受講生に告知した以上は、学期途中での受講生の混乱を避けるためにも、今後も大きくは方針を変更せずにその方向性で進めていくことが現時点ではベターかもしれないという判断を、その時点では下した。

以上が、筆者が担当する講義系科目に対する「遠隔授業」の実践である。幸い、これらの科目に関しては、比較的円滑に授業運営ができ、大きな問題は発生しなかった。しかし強いてあ

げるならば、以下のような点が課題として指摘できる。毎回の授業時に実施された「小課題」に関して、受講生の全体的な負担を勘案して筆者は、例えば「少なくとも200字以上程度」と字数の下限は明記し、上限は明記しないという形をとったが、真面目でモチベーションが高い受講生の一部においては、逆の意味で「たくさんの字数を書かなければ…」という強迫観念ないしはプレッシャーにつながった可能性は強ち否定できず、実際に、ほぼ毎回、数千字レベルの「小課題」を提出してくる者もいた。そこで当該科目において何回目かの授業時に、「LMS」の「アンケート」機能を用い、「小課題の字数に『上限』を設定すべきか？ あなたはどうか考えますか？」といった問いかけを全受講生に対して実施し、その理由も含め反応を観察してみるなどの対策をしたが、結論としては、「沢山書きたい人は好きでやっているのだから、『上限』は特に設定しなくても心理的負担にはならないと思う」といった回答も多かったため、現状、小課題に関して「上限」は設定しないままではあるものの、この点に関しては、もし何かできる対応策がありうるのであれば、今後、検討し改善していきたい。

3. 演習系の科目に関する教育活動の実践と課題 ～「遠隔授業」のみのパターン～

演習系の科目として筆者は、配当年次が1年生の「基礎演習A」(前期) および「基礎演習B」(後期)、配当年次が3年生・4年生であるいわゆる「ゼミ」的な科目として「専門演習1a」「専門演習1b」「専門演習2a」「専門演習2b」、そして4年生の卒業研究論文の指導科目である「卒業研究」という7科目を担当していることは、既述した。このうち、「専門演習2a」・「専門演

習2b」・「卒業研究」という4年生が担当である3科目に関しては、一括して実質、卒業時の履修単位として必須となる「卒業研究論文」の指導にあてているため、下記ではまず、それらに関する教育活動の実践の現状に関して、1つの事例として述べていく。

4年生に対する卒業研究論文の指導に関してはもちろん、例えば学生の書いた原稿の「一言一句」までのレベルで添削を実施するか否かは、教員によっても指導方針はそれぞれであると考えられる。筆者の場合は、少なくとも4年生の前期頃の時点においては、そういったレベルでの指導ではなく、もう少し概観的な、ないしは当該学生の卒業研究論文の全体的な方向性的な部分での指導を、例年実施している。そして本年度も、「遠隔授業」形式でのゼミの中で、既述した「講義系の科目に関する教育活動の実践と課題」の中でも書いたような形式をとりながら、前期、基本的にはそういった方向性で指導を開始したのであるが、結論からいって、途中で、非常に困難が生じた。実際に統計的データを取って統計的な各種検定にかけて実証してみたことはないため、ここではあくまで感覚的な議論となってしまうものの、恐らく、筆者の「専門演習」に応募してゼミ生となる学生は、その人口統計学的・社会経済的・心理的・行動的といった各種属性という観点から見れば、比較的、以下のような者が多い印象である。例えば、公務員志望や教員志望ではなく、実家が営む何らかの事業継承志望者でもなく、各種の資格取得の熱烈な志望者でもなく、しかし、マーケティングや商業に関してはもちろん興味や関心が高く、就職や進路の希望としてはビジネスの現場が多く、例えば業界としては小売・卸・各種サービスなどである。

一方、このコロナ禍の現状において、様々な業界、そして企業が、新規採用に関する就職活

動のありかたを再考し、変更せざるを得なかった。具体的な選考方法のありよう、例えば、エントリーのしかた、選抜のしかた、面接試験のしかた、採用予定人数など、それらの変更点は多岐に及ぶ。そういった就職活動を巡る大きな環境変化の中で、4年生は日々悩み、大きく翻弄され、臨機応変な対応を余儀なくされた。そういった苦労の中で、就職活動だけでも心身ともに疲弊しきってしまい、卒業研究論文への取り組みまで余力がもはや残っていない学生は、恐らく、筆者のゼミにおいてだけではなく、他のゼミあるいは、全国の他の大学の4年生においても多かったのかもしれないとは推察する。しかし、いずれにしても、とにかく例年に比べても非常に進行状況が遅く、指導教員である筆者からの「コースニュース」等も充分に閲覧せずに放置したままの者や、毎回「Zoom」にて実施して、終了後には即「LMS」の「コンテンツ」上にアップしている「卒業研究論文指導」の動画に関しても、閲覧していない者が目立った。このような中、後期から「LMS」に

導入され利用可能となった「個別指導コレクション」機能等も活用しつつ、卒業を目指して今年度「卒業研究論文」を提出する意思がある者に対しては、特に個別に強く働きかけ、根気強く指導を続けている現状である。

なお、上記の「卒業研究論文」に関する「Zoom」を用いての「オンライン指導」に関しては、学生はもちろん、担当教員である筆者自身も、また全ての人間がその有する各種資源は有限であって、どんな活動に対しても無限大に時間などの資源を費やせるわけではない。従って、効率的に進めるために、当該「オンライン指導」の授業時に先立って、事前に「LMS」上にて、下記の図表10のとおり、指導してもらいたい原稿のWordファイルや、特に指導してほしいポイントを、毎回、ある程度示してくれるよう求めた。これによって、当該授業時の指導は、かなり効率よく進んだと考える。

しかしながら、幾つかの課題も残ったと考える。それは、上記の実践状況の記述の中からも浮かび上がってきている。環境の変化、あるい

プレビュー	
講義に関する説明	2019年「オンライン指導」用(ファイル送信レポート) 「卒業論文の指導」用(質問)や「参考文獻リスト」等に関して、2019年オンライン指導を受けない人は、事前にここへアップしてください。 (エントリー用の「ス」は、「掲示板」へ作ってあります。)
受付開始日時	
受付終了日時	2020-11-09 23:55
受付終了後の提出	許可しない
ポストフォーロ/質問設定	ポストフォーロに追加/コースメンバー全員が閲覧・コメント可
学生による再提出の許可	再提出を許可する
添付ファイル	
<input type="button" value="ファイルを選択"/> 選択されていません <input type="button" value="アップロード"/>	
<input type="button" value="閉じる"/>	

図表10 卒論指導に関するファイルや指導希望点の例

はそこから受ける負荷の大きさ等から心身ともに疲弊しきってきている学生に対する指導のあり方として、筆者個人としては、指導教員としてその時点その時点では、自らの有する全力をもって最善を尽くしたつもりではあるが、もっとできることは果たしてあったのだろうかという、自らに対する問いである。当然もし万が一、何か方策があったのだとしたら、努力しなかったという点である。ただ、この点に関しては、本稿執筆時点では、現在進行中の事案であるため、この振り返りは次年度以降に活かしていきたいと考えている。

4. 演習系の科目に関する教育活動の実践と課題 ～「対面授業の試行」を組み合わせたパターン～

前節まででは、「遠隔授業」形式のみでの実践を記述してきた。本節では、前節同様、「演習」系の科目ではあるが、本学にて後期から科目によっては試験的に開始された「対面型」による授業の「試行」を組み合わせたパターンでの実践に関して、記していく。

3年生のゼミである「専門演習1a」・「専門演習1b」の受講生たちは、昨年度、すなわち2019年11月の時点で筆者のゼミへの配属が決まった16名のメンバーである。ゼミのメンバーたちは、互いにこれまでの大学生活においては特に面識や交友関係がない者が多いため、通常の年度であっても、ゼミが開始されて以降、4・5月頃はまだ互いに打ち解けず、なかなか全体としての一体感も見られず、例えばグループ・ディスカッションなどのグループ・ワークを行っても、あまり話が弾まないといった現象はよく見られる。しかし例年であれば、対面型で毎週リアルに顔を合わせる体験が積み重なっ

ていくうちに、個人的にも会話や交流が進んできて、前期開始後数か月も経てば、相当に親しくなっていくことが多い。しかし本年度に関しては、そもそも互いにリアルに「顔合わせ」すらしたことがないままで、学生からしてみれば突如ゼミが開始された。そして、授業におけるグループ・ワークやPowerPointファイルを用いての個人発表等に関しても、対面型ではなく、「Zoom」上の会議室でのやりとりのみであった。もちろんそれのみが原因とは断定できないものの、前期の「専門演習1a」開始後、数か月が経過して、季節は夏休み間近となっても、集団としてのまとまりや連帯感に欠け、メンバー相互のよそよそしさ感はあまり変わらなかった。筆者の担当する講義科目と同様、この科目においても「LMS」もフル活用し、例えば、個人に課した課題やグループに課した課題等のいずれに関しても、「LMS」内の当該コースの「レポート」のコーナーに提出させたが、メンバー互いに対する認識や関心を促進するために、あえて「提出者は全員が互いの提出物を閲覧可能」という設定にし、メンバー相互間で「コメント」をつけさせる等の試みもしてみたが、状況はあまり変わらなかった。

しかし、夏休みが終わり、後期の「専門演習1b」が開始された直後頃から、このような状況に突然、大きな変化が現れた。その1つの契機となった出来事は恐らく、後期開始してから早々に「Zoom」上で実施した個人発表である。これは、メンバーたちに夏休み中、自分の「卒業研究」に役立ちそうな本を1冊読むことを課したのであるが、その本に関する感想や考察を発表させたものである。どの学生の発表も彼／彼女らしさや関心・意識の高さなどが伝わってきて担当教員としては総じて面白かったのだが、とりわけ、ある1人の学生の発表内容は興味深いものであった。その本で扱われている内

容には心理学的な理論・モデル的な要素も含まれていたのだが、当該学生はそれを他のゼミ生にわかりやすく伝えるために、非常に踏み込んだ事例を出して説明した。聞きようによっては、「無礼だ」「不躰だ」と感じる可能性もある、ぎりぎりのラインを攻めていった切り口であった。聞いていた他のメンバーの中には、一瞬、動揺した者もいたかもしれない。しかし、ある意味でこの出来事は、それまで互いによそ行きの「仮面」をかぶって深いレベルで互いに交流しようとしていなかった集団の中に、一陣の風を吹き込んだ出来事でもあった。これは「自己開示」がもたらす効果に類似している。今から振り返ってみれば、この出来事は、これ以降、ゼミ生集団の中での「グループ・ダイナミクス」が大きく動いていくこととなる、歴史的な事件であった。

社会の中に生きる人間の心理・行動を扱う学問である社会心理学には、その中の1つの専門領域として「集団力学」といわれるものがある。その名のとおり、集団内の成員たち間でのパワー関係、すなわち社会的勢力のありようや影響の及ぼし方を研究する学問領域である。こういった見地から見ても、上記は、筆者の「ゼミ」という集団ないしは組織の構造を、大きく変化させていく好機にもなりうると考えた。そこで、間髪入れず、上記の出来事が起きた翌週頃には、授業時の「Zoom」会議室上で、「私をサポートし、組織を引っ張っていくのを助けてくれるような、『ゼミ幹事』を何人か選びたい」との旨を告知し、リーダーシップや実行力、観察眼の鋭さ、モチベーションの高さ等の個人特性にも考慮しつつ、まず「ゼミ長」および「副ゼミ長」を各1名選抜し、当該人物に対し個人的に打診した。幸いなことに、彼らはこの依頼を快諾してくれ、筆者は彼らの意見も大いに参考にしつつ、さらにその翌週頃には、

彼らや他のゼミ生をサポートする役割として、役職無しの「ゼミ幹事」2名を選抜し、彼らに教員や他ゼミ生への助力を依頼した。これらの決定プロセスにおいては、通常用いているゼミ全体の「Zoom」会議室とは別に、このミーティング専用の会議室を設け、そこにおいて、当該メンバーと筆者のみの数名での会合を重ねた。並行して、彼ら4名間で円滑な連絡を取り合えるよう、ゼミ長および副ゼミ長の提案により、まず彼ら4名でのLINEグループが結成され、彼らでの間でのコミュニケーションは劇的に促進されていった。さらに、彼らからの提案により、ゼミメンバー全員の間での連絡や交流を円滑にすべく、16名全員でのLINEグループも結成された。これらの一連のプロセスにより、担当教員である筆者、そしてゼミ長等の広義の「ゼミ幹事」4名、そしてゼミ生全員、いずれのレベルの組織においても、意思疎通や交流が格段に促進され、組織・集団としての団結力も徐々に強まっていった。また、気軽に彼らが日常的に使いこなしているLINEによるグループ結成は、単に「LMS」を使用しての担当教員からのやや一方的な連絡や指示といった形で情報流の他に、彼ら／彼女らの間で双方向的に意見交換や情報共有ができるプラットフォームができたという点において、メンバーたちに安心感をもたらしたと推察される。

このような状況の進行と並行して、たまたまではあるものの、この頃ちょうど外的な環境から、「ゼミ」というこの組織ないしは集団の構造を変革できるかもしれない転機が訪れた。それは、「専門演習」等の科目においても「対面型授業の試行」が可能になったという全学的な告知である。本学教員として、この告知を確認した際、筆者自身は率直に言って、例えば自らの担当する「専門演習1b」に関し「対面授業」を試行するか否かの意思決定において、非常に

迷った。その主な理由は、以下のように幾つか存在した。第1に、仮にこれを実施した場合、恐らくこの「専門演習1b」が配当されている「授業曜日・時間帯」である火曜4限のみ、ゼミ生は本学キャンパスに来校しないとイケない。しかし、恐らくその時間帯前後の、例えば火曜3限や火曜5限には他の別な科目を履修している学生も多いと考えられる。かつ現在、それらの科目は高い確率で「遠隔授業」型にて授業が行われているであろう、そして今後もそうであろうと推測される。現実的に考えれば、彼らのそういった科目の遠隔授業への円滑な参加が不可能になったり、困難になったりする可能性も充分考えうる。

第2に、上記の点とも多少関連するが、学生は後期の科目はほぼ全てが「遠隔授業」型で実施されるであろうと考え、例えば自宅外通学生の場合であれば、節約のために下宿を引き払い、遠方の自宅へ帰省してしまっている者も現実にいる。また、自宅生であっても、もはや今や「通学定期」は購入しない、あるいはアルバイト収入や保護者の収入の減少などによって経済的に困窮し購入したくてもできないという者も一定の割合で存在する。例えばこういった物理的にキャンパスに出校することが困難なゼミ生を除外して、出校できる者だけを出校させて「ゼミ」という授業を対面型で実施した場合、前者のゼミ生たちに対して不利益や疎外感を与えることがないのかという懸念である。

第3に、もちろん授業を実施している時間中は、「対面授業の試行」に関する全学的な「ガイドライン」や学部学科の定める「マニュアル」を厳守し、担当教員である筆者の責任と監督の下、教員自らや参加した学生たちの行動を厳重に管理することは当然であるが、その対面授業試行のために学生たちが出校したり下校したりする際に、個人として私的に例えばファミ

リーレストランや居酒屋、カラオケ等の施設に立ち寄り、そこで「密」な状況下で他者と接触する可能性までは否定できない。事前に相当な強度をもって、そのような行動は慎むように担当教員から学生たちに「依頼」しても、かつ、当該学生たちのこれまでの言動を根拠として判断すれば、彼ら／彼女らを担当教員自身は相当に「信頼」するにせよ、学生が絶対にそのような行動はとらないとまで断言することは、確率的にも不可能であると考えられた。

人間は、いついかなる状況下においても、完全に「合理的」な意思決定をして行動するとは限らない。例えば戦争犯罪やテロの発生現場等、人間の特定個体にとって極限的な危機的状況下において、ある個人が自らの命を投げ出してまで、他者の生命を守ろうとする行為は、現実社会においても古来より現在に至るまで、事例としてしばしば観察され報告されている。いわゆる「他助」的な行為である。もちろん何をもって「他助」的と判断すべきかに関しては、議論の余地がある。例えば、時間軸や生命体としてのレベルをもっと拡大してその事態を俯瞰してみれば、当該個体はその場で死に絶えたとしても、その犠牲の上に、当該個体が属する組織や集団、あるいは民族や国家は、命をつないだかもしれない。その意味においては、当該個体が自らを犠牲にしてまで他の個体の生命を守ろうとする意思決定は、「他助的」ではなく「自助的」であって、当該集団や組織、ないしは民族・国家といった観点から見れば、それは「合理的」な意思決定であるといった議論は可能であろう。しかし、ここではもう少しミクロなレベルで論じていく。一般的には、消費者の意思決定において、検索する情報の質量といった観点から共に優れた情報収集プロセスを経て意思決定すれば、複数ある「代替案」の中から「合理的」な選択をできる確率は概して高

まる。様々な諸要因によってそれが妨げられることがある。もしこの「対面授業試行」の実施場面において、そういった事態が発生し、それがトリガーとなって、もし万が一学科や学部、大学全体において、新型コロナウイルス感染の「クラスター」が発生してしまったとしたら、一体どのようにして、担当教員はその責を負えばいいのだろうかという点は特に悩ましく感じられ、担当教員としての意思決定においては、率直なところ、若干の迷いを生じた。

しかしここで改めて、やはり「顧客」たる消費者のニーズをまず意見聴取して客観的に把握し、それに基づいた上で意思決定すべきであろうと考え、翌週のゼミ時の「Zoom」での授業開始の冒頭、ゼミ生たち全員に対して、「この件に関して、あなたたちはどうしたいか？」という問いを率直に投げかけてみた。その日の授業は、それ以降、「Zoom会議室」においてゼミ生全員による活発なディスカッションが行われることとなった。筆者は、議論の途中では口をはさむことなく、ただ彼ら／彼女らの議論を見守っていた。その場でゼミ生たちから出された意見の内容、そして意見分布は、ある程度、事前の筆者の予測に類似していた。すなわち、後者に関していえば、「専門演習1b」というこのゼミの「対面授業の試行」に関し、実施に賛成意見の者と反対意見の者が、「やや賛成」ないしは「やや反対」といった、連続体上でのグラデーショナルな部分も含めて、人数的にはほぼ拮抗している状況であった。そして、その主張の根拠となる「理由」の部分にも留意して「Zoom」会議室上での議論の趨勢を観察していたが、筆者が上記で懸念したようなポイントがほぼ予想どおりに提示され、彼ら／彼女らのやりとりの大きな論点となっていた。結局この日の授業においては、ゼミ生全体の「総意」的な形で「結論」には至らなかったものの、当事

者であるゼミ生たちのリアルな意見を率直に聴取できたことは、その後の筆者の意思決定において大きく役立つこととなった。

筆者は普段、「Zoom」での授業の様子は、この「専門演習1b」に限らず、「専門演習2b」や「基礎演習B」等、担当する他の科目においてもそうであるが、その様子を録画した動画ファイルを、授業終了後すぐに、受講生なら誰でもいつでも視聴できる状態で、「LMS」上の当該「コース」内の「コンテンツ」にアップしている。もちろん、いわゆる「顔出し」等は嫌がる学生がほとんどなので、その点には配慮した上で、主に、その時の「音声」や「画面共有」機能で投影したファイル等がメインである。これは、受講生たちが、例えばその日何らかのやむを得ない事由で授業を欠席した場合に当該授業日の内容をフォローアップするのに役立っているようであるのはもちろん、当該日には出席して授業にも参加していたがネット回線などの事情によりあまり安定的に参加できなかった、あるいは、そういった問題はなかったにせよ、ちょっと「復習」的な意味で再度聞きたいといったニーズを充足しているように考えられる。そして、それは単に学生にとってのみならず、教員にとっても、少なくとも筆者にとっては当てはまり、「もう一度この授業内容を振り返ってみようかな」「ちゃんとこの日に伝えたいと思っていた内容を私は学生に伝えられていたのかな？」といったような不安を抱いた際等に、非常に役立っている。このディスカッションに関しても、同様であった。何度か聞きなおし、本件に関しての「消費者」であるゼミ生たちのニーズを把握し、意識を共有し、「ゼミ」という集団・組織としての「着地点」を発見しようと努めた。

その結果、本件に関し、担当教員としての自らの中では、「実施すべき」という結論に達し

た。しかし単に教員側からの一方的な「押しつけ」的働きかけではなく、彼ら／彼女らが自ら「参加したい」、「そういうイベントを実施したい」と自発的ないしは自律的に感じ考えるような環境づくりにも留意した。いわゆる「内発的動機づけ」的な観点である。既述したゼミ長・副ゼミ長含め、役職無し「ゼミ幹事」まで含め、広義の役職者4名に対し、私の大まかな考えを伝えた上で、彼らの意見を傾聴し基本的には彼らの賛意を得た上で、「もしこの『対面授業試行』を実施するとしたら、どのような日時、内容などが望ましいと考えるか？」等、現実的な企画の起案時点からゼミ生全体への連絡などに至るまで、実務の多くの部分に彼らを巻きこんでいくことを意識した。そういった一連の取り組みは、筆者の担当する他科目でも掲げている「アクティブ・ラーニング」的な科目目標を少しでも達成するための意図もあった。ただしもちろん、「アクティブ・ラーニング」とは一体何なのか、あるいは、いわゆる「PBL」的な教育指導アプローチとの共通性や弁別性などの観点においては現状、議論がわかれるところであろうと考えられる。しかし、いずれにしても、喫緊の課題としての「対面授業試行」の実施の案件に関しては、大方のゼミ生の同意やゼミとしての方針とが固まり、実施する経緯となった。

なお、上記のプロセスが進行していたのは、本学において後期の授業が開始されての直後頃、具体的には主に2020年9月頃～10月頃であった。後期の3年生のゼミである「専門演習1a」の授業において、最初の方の授業回においては、夏休みの課題を「Zoom」上にて個人発表するという内容だったのは既述したとおりであるが、それを「第1シリーズ」とするならば、「第2シリーズ」は、コロナ禍の我が国において、いわゆる「カスタマー・ハラスメン

ト」、略して「カスハラ」とも呼称される現象が多発している現状に関しての、調べ・まとめ・議論・発表などの「学び」であった。まず、ゼミ生たちに対しては、この「カスハラ」に関して、本学が契約しており自宅からでもアクセスできる新聞記事データベースである「日経テレコン」等を活用して、「カスハラ」について調べるように求め、自らが検索した上で目に留まった記事を読んだうえで、その内容に関して、「個人ワーク」としてWordファイルにて「要約」をまとめさせ、「LMS」の「レポート」のコーナーに提出させた。それは「提出者全員が閲覧可能」な設定とし、他者の優れたレポート内容を閲覧して学問的刺激や関心を高めつつ、その後、その個人ワークで学んだことをもちよっての、「Zoom」上での「グループ・ディスカッション」へと進み、そこで議論して、得られた知識や認識などを共有した上で、グループでPowerPointファイルを作成し、その数週間後には、「Zoom」上でそのファイルを用いての「グループ発表」を実施するに至った。この企画に関しては、個人ワークとグループ・ワーク、加えていえば、「LMS」と「Zoom」とを、「学び」のツールとしてのその強みを生かしつつ上手く組み合わせられたのか、どのグループも全般的に完成度が高く、良質なプレゼンテーションとなった。これは、彼ら／彼女らの自信にも繋がった一方、恐らく、これらのプロセスを通じて、前期から高まっていた「他のゼミ生ってリアルに会ってみたらどんな人なのか?」「対面授業の試行で見てみたい」といった感情にも、ある程度、連動していき、ゼミ生全体が「対面授業の試行」を容認する空気を醸成していく一助になったと推察する。

この間のプロセスにおいてはもちろん、実施に関しては、本件に関連する本学部・学科の役職者、すなわち学部長、学科主任、教務委員長

などの先生方のみならず、経済学部支援センターの職員様などからの多大なるご助言・ご尽力・ご協力なども賜りながら、10月下旬から11月上旬の2度にわたり、無事に遂行することができた。ここに改めて、深く感謝申し上げる次第である。なお、当日の授業内容に関して簡単に述べれば、既述したとおり、事前にゼミの授業時間内やそれ以外にも「Zoom」等で「ゼミ幹事」やゼミ生個人と意見交換を重ねる中で、やはり、もしこれを実施するのであれば他のゼミ生とリアルな「人間」としてコミュニケーションすることができる希少な機会なため、そういったことも踏まえて、「『対面授業』でしか体験できないような内容を期待する」といったようなニーズが多かったことから、当初、企画していた「自己紹介」的な内容に加え、「他己紹介」、過去のゼミ生が執筆した「卒業研究論文」の紙媒体の現物の閲覧、それを読んだの感想や意見等の発表、および議論などを主たる内容とした。これに関して、後日、参加者に対して「LMS」の「アンケート」機能を用いて意見や感想を聴取したところ、概ね満足してくれたようではあった。担当教員である筆者自身も、4年生のゼミ生は過去に2019年度中ずっと対面でリアルに顔を合わせてのコミュニケーションが実行できていたため、それはともかくとして、3年生のゼミ生に関してはこれが実質上はほぼ初の、互いに「個体認識」した形での対面となったので、感慨があった。参加者たちにおいても、これを機に、互いをリアルな「人間」として実感できるようになり、互いに親しみが高まったようであった。

しかし課題としては、当該科目に関する筆者のここまでの授業運営を、現時点でとりあえず客観的に振り返ってみるならば、何とか難局は乗り切ったと判断できる程度のことであって、改善点はあちらこちらに散在していたといえ

る。少なくとも例年であれば、かなり早期の時点で、ゼミ生同士の親近感を高めるために、「アイスブレイク」的な機会を、例えば「他己紹介」や簡単な議題での「グループ・ディスカッション」等の実施によって、図っていた。それが今年度に関しては、「遠隔授業」やいわゆる「オンライン会議システム」の各種ツール等に関する習得や対応などに対してのみ注視してしまい、そういったゼミ生個人や、ゼミ全体の組織や集団としての運営までに配慮が十分に及ばせなかった可能性は否定できない。自らの持つ資源や能力のぎりぎりの限界まで尽力したつもりではあるものの、そういった観点では、悔いが残ると言わざるを得ない。しかし、いまだ3年生のゼミ生も4年生のゼミ生に対しても、指導教員として関わっていく時間は充分に残されている訳であるので、今後ともその教育・指導に邁進していきたいと考える。

5. おわりに

前節で述べたように、特に3年生対象の「専門演習1a」「専門演習1b」に関しては、本学の学修システムの基盤である「明星LMS」を柱としつつ、適宜、その時その時の場面や状況などにあわせて、いわゆる「オンライン会議システム」の1つである「Zoom」や、「対面授業の試行」、そして時にはそれ以外のツール、例えばLINE等も組み合わせて併用しつつ、何とか授業運営が軌道に乗りつつある。個人／組織／集団といった様々な水準での議論と同様、それぞれのツールには、「強み」や「弱み」がある。しかし、それらはある程度、「ユーザー」である消費者側が見極め把握し、うまく有機的に組み合わせ活用していくことによって、単に、 $1 + 1 + 1 = 3$ というような結果以上の、総合的な教育的効果を生み出していくことも、場合

によっては、不可能ではないのかもしれないという希望を持つことができた。

全世界規模の新型コロナウイルス感染拡大による影響は、単に消費者個人の日常生活に対してのみならず、我が国においても多くの集団／組織に関しても、実務遂行上、多大な影響を与えた。それは、本学本学部本学科における授業等の教育活動においても、もちろんであった。例えば1年前頃の時点では、ウィルスや感染症などの当該分野の専門家以外においては、このような環境変化を予測していた者は少ないであろうと考えられる。その意味では、感染拡大が急速に進行しつつある状況下において、国民生活の諸分野において、国連や政府、地方自治体等からの要請にも充分に応えつつ、各事業者がそれぞれの対応を企画し実行していったその現実的なプロセスは、まさに、現在進行形の生きた「事例」でもあった。各事業者などが苦悩しつつ計画し実行したその対応策の全てが、客観的に見て妥当なものであったのかの評価や判断は、いまだ現時点では下しようがないであろう。恐らく、現代の人類を襲ったこのような未曾有の事態が、今後ある程度の終息を収めた後に、後世に生きる消費者たちがこれを1つの「事例」ないしは「歴史」として振り返った際に、客観的な判断を下すこととなる。

そういった意味においては、本学のみならず、我が国ないしは全世界の教育界において、消費者に求められる「新たな行動様式」と同様に、新たな「教育活動様式」に関するあるべき姿については、現時点では試行錯誤の中、関係するすべての当事者たちが、集団／組織／個人など、様々なレベルにおいて模索しつつ、自らにできる範囲での努力を続けており、事態はいまだ現在進行形ともいえよう。しかしながら、例えば、医学や薬学など、新型コロナウイルス感染拡大に歯止めをかけるべき直接的な責任を

有する領域における日々の理論的ないしは実務的な懸命の努力のみならず、この時空間を共有する人間1人1人が、それは例え教職員であっても企業人であっても学生であってもその他の人間であっても、それぞれ苦闘しつつも環境変化に適応し、この未曾有の状況からの様々な要請に適合する形で各々が学習しつつ意識と行動を変容していけば、必ずやいつしか、この難局を人類皆で克服し、他者を「信頼」し、安心して安寧な、公的あるいは私生活を再び営める日が到来するであろうと考える。

★参考文献

(執筆者個人や組織等が特定されている文献に関しては、そのアルファベット順。それ以外の文献に関しては、発行年月日順。)

- 安齋 勇樹・塩瀬 隆之 2020 『問いのデザイン ～創造的対話のファシリテーション～』 学芸出版社
 ダグラス・マクレガー 1970 『企業の人間的側面 ～統合と自己統制による経営～』 高橋 達男 (翻訳) 産業能率大学出版部
 ダニエル・カーネマン 2011 『心理と経済を語る』 友野 典男・山内 あゆ子 (翻訳) 楽工社
 ダニエル・カーネマン 2014 『ファスト&スロー (上) ～あなたの意思はどのように決まるか?』 村井 章子 (翻訳) 早川書房
 ダニエル・カーネマン 2014 『ファスト&スロー (下) ～あなたの意思はどのように決まるか?』 村井 章子 (翻訳) 早川書房
 ドナルド・R・ウッズ 2001 『PBL (Problem-based Learning) ～判断能力を高める主体的学習～』 新道 幸恵 (翻訳) 医学書院
 エドガー・H・シャイン 2009 『人を助けるとはどういうことか ～本当の「協力関係」をつくる7つの原則』 金井 壽宏 (監修)・金井 真弓 (翻訳) 英治出版
 エドガー・H・シャイン 2012 『プロセス・コンサルティング ～援助関係を築くこと～』 稲葉 元吉 (翻訳)・尾川 丈一 (翻訳) 白桃書房
 エドガー・H・シャイン 2014 『問いかける技術 ～確かな人間関係と優れた組織をつくる～』 金井 壽宏 (監修)・原賀 真紀子 (翻訳) 英治出版
 エドワード・L・デシ 1980 『内発的動機づけ ～実験社会心理学的アプローチ～』 安藤 延男・石田 梅男 (翻訳) 誠信書房

- 福村 裕史・飯箸 泰宏・後藤 顕一 2020 『すぐにできる! 双方向オンライン授業 ～Zoom、Teams、Googleソフトを活用して、質の高い講義と化学実験を実現～』 化学同人
- Hannah Arendt 1994 『人間の条件』 志水 速雄(翻訳) ちくま学芸文庫
- Hannah Arendt 2016 『責任と判断』 Jerome Kohn(編集)・中山 元(翻訳) ちくま学芸文庫
- 本間 道子 2011 『集団行動の心理学 ～ダイナミックな社会関係のなかで～』 (セレクション社会心理学) サイエンス社
- J.C. Turner 1995 『社会集団の再発見 ～自己カテゴリー化理論～』 蘭 千壽・内藤 哲雄・磯崎 三喜年・遠藤 由美(翻訳) 誠信書房
- 釘原 直樹 2011 『グループ・ダイナミックス ～集団と群集の心理学～』 有斐閣
- Michael A. Hogg・Dominic Abram 1995 『社会的アイデンティティ理論 ～新しい社会心理学体系化のための一般理論～』 吉森 護(翻訳) 北大路書房
- 中井 俊樹 2015 『アクティブラーニング(シリーズ大学の教授法)』 玉川大学出版部
- 野中 郁次郎・竹内 弘高 1996 『知識創造企業』 梅本 勝博(翻訳) 東洋経済新報社
- 野中 郁次郎・勝見 明 2020 『共感経営 ～「物語り戦略」で輝く現場』 日本経済出版
- 佐伯 大輔 2011 『価値割引の心理学 ～動物行動から経済現象まで～』 昭和堂
- 山岸 俊男 1998 『信頼の構造 ～こころと社会の進化ゲーム～』 東京大学出版会
- 山岸 俊男 1999 『安心社会から信頼社会へ ～日本型システムの行方～』 中公新書
- 山岸 俊男 2011 『社会心理学 ～歴史に残る心理学実験から現代の学際的研究まで～』 新星出版社